

もっと世界とつながる グッとくる マガジン

特集

GM

GL~~Ø~~BAL MIND

GLOBAL MIND IS THE SPIRIT OF OSAKA INTERNATIONAL EDUCATIONAL INSTITUTION

[グローバルマインド]

68

Sep. 2023

学校法人 大阪国際学園
広報誌

学長対談

大阪国際大学短期大学部
幼児保育学科2年

岩根 心優さん

宇野 美姫さん

今日から
できる! 呼吸で

セルフメンテナンス

学生のBOOKレビュー

人間科学部
心理コミュニケーション学科3年

中岡 輝聖さん

学園HEAD LINE

研究室探訪

学び方を学び、
人生を豊かにする
高大連携

大阪国際中学校高等学校に 壁面アートが登場！

グローバル情報局

大阪国際学園から耳よりニュースをお届けします



★壁面にはQRコードを貼付しており、動画が埋め込まれています。

TSUBASA STREET

「TSUBASA STREET」は、若々しい力が次々と生まれ、羽ばたいていく物語。

大阪国際学園の90余年の歴史に重ねて、

日々成長していく生徒たちの姿を10組のクリエイターたちが描きました。

一つとして同じものがない自分だけの翼をひろげて、志を持ち、

世界へ巣立っていく生徒たちへのエールです。



Take off to a bright future!

動画の概要 —

TSUBASA STREETが表現する「歴史」「多様性」「可能性」「成長」「未来」。
そんな思いが描かれた「風景」は、大阪国際中学校高等学校で学ぶ生徒たちの、
青春の「情景」になっていきます。輝くような日常、戸惑いや不安、答えの無い
青春の葛藤の中で、自分を見つめ、道を探す。それが、やがて「翼」という形で、
自身の飛躍のための大切な糧になる。ぜひご覧ください!!



高大連携 学び方を学び、 人生を豊かにする



学びを密接に連携させ 学修能力をより高める

「高大接続」という言葉を聞いたことがありますか？もともとは文部科学省による「高大接続改革」に端を発するもの。高等学校と大学との教育をより密接に連携させることで、大学での学びをスムーズに進める効果を期待するものです。変化の激しい時代において、新たな価値を創造していく力を育成するため、様々な教育実践が提唱されています。このような背景の中で、現在は多くの大学が独自の「高大接続」カリキュラムを開発、実施しています。

OIU・OICの「高大連携」は 学びをつなぎ、生きる手応えへ

高校と大学の学びをつなぐ試みは、本学においても早い時期から行われていました。「高大連携」と名付けた取り組みは、当初は高校生が大学の講義を受ける形式でしたが、少しずつその形を進化させ、近年はグループワークや学外での活動を取り入れたものに。学びのギャップを埋めるだけでなく、地域や人々に触れることで、自分と社会とのつながりや、生きる手応えを感じることが狙いです。そんな本学の「高大連携授業」をご紹介します。

自分で問いを立て、解を見つける。 人生への向き合い方を高大連携授業で学ぶ。

『高大接続』何が問われているのか

近年の大学教育と入試制度の一体改革という文脈の中で、『高大接続』がフォーカスされるようになったわけですが、そこでは一体何が問われ、何が問題となり、それはなぜ問題なのか。大学人としてつかまえる必要があると考えています。

高校生に問われることは、なぜ大学に行くのか、大学で何を学ぶのかというようなことなのだろうと思います。そして、大学に問われることは、大学は何をするところなのか、大学の学びとは何かというようなことなのだろうと思います。つまり、なぜ大学生になるのか、大学は何を以って大学であるのか、というような存在意義に関わる本質的な問いが立つてくるのだと思うわけです。

『良い(とされる)大学に入り、良い就職ができれば人生は安泰だ』というような時代は過ぎ去りましたし、選ばなければ望む人は大学進学がかなう時代になりましたから、高校生は「大学に行った方が良いのだろう」と頭では理解できても、「本当にそれで良いのだろうか?」ということに向き合わざるを得なくなっているのだと思うわけです。高校の先生も実は同じことを考えていて、愛する生徒を目の前にし、「この生徒にとって

何が良いのだろうか」と苦悶するわけです。

これは、いわゆる学力の高低とは無関係のはずです。大学の教員もやはり同じです。社会で必要とされる『資質や能力』を育み、社会へ送り出すことが「本当にこの学生にとって幸せなのか」と思い悩むわけです。『良い』とされる、あるいは『正しい』とされる何かの言説に頼ることができた時代から、その『良さ』や『正しさ』を改めて問うことを我々に突きつけているのだと思うわけです。

『問う』ことは『学びの構え』

『問う』ことは、この時代に向き合うキーワードの一つになるだろうと考えています。『良さ』とはなにか、『正しさ』とはなにか、というような解が不明瞭かつ不確かで個別性をまとう問題に出会ったとき、『問う』という『構え』の出番になるのだと思うからです。どついう『構え』なのかというと、「正解を求めない」「解に逃げない」ということだろうと考えています。何か正しい答えがあると考えてしまい答えを求めてしまうと、人間は『考える』ことを止めます。つまり、『問う』ということとは、どこまでも『考え続ける』ということなのだろうと思うわけです。そして、『良さ』や『正しさ』がよくわからない今を生

きる私たちは精神の奥底で、その『良さ』や『正しさ』を『問い』、『考え続ける』ことを必要としているのだらうと考えています。これこそ、学問することそのものであり、大学が大学たる所以ではないでしょうか。問うことや、考え続けることは元来、大学が得意とするところであるわけです。しかし、基本的に大学入学と同時に学部学科に所属しますから、特定の専門領域に入ることで、この『問う』ことが、その『門』の目的や作法に沿って『問う』こととなり、それに従って限定的に『考える』こととなります。○○学、○○論というような、特定の専門領域には、『問う』目的が固有にあり、その目的に連関する形で『考える』が従ってくるのです。その特定の専門領域の目的そのものに對しても、『良さ』や『正しさ』を『問う』必要があるわけですから、学部での専門的な学び以前に、特定の専門領域の目的や、そこにある特定の言説に限定されない形で、『問い』、『考え続ける』ための『構え』として、『問う』方を学ぶ、あるいは『学び方』を学ぶ『必要』が出てくるということになります。高校までの学びと大学からの学びをつなぐものとして必要なことなのだろうと考えています。

大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部
基幹教育機構 キャリアサポートセンター

山本幸一 講師



OIU・OICにおける 高大連携授業の取り組み

本学では併設する高等学校を対象に、多彩な内容の「高大連携授業」を展開しています。今回のGMでは、その一例として2023年に行われたものを取り上げます。前期は大阪国際滝井高校総合進学コースの3年生が参加し、その様子を5ページにレポートしました。後期は大阪国際高校Ⅱ類(総合探究コース)の2年生が参加予定。ここではコンセプトやねらい、プログラムをご紹介します。

2023年度 高大連携授業 後期の内容

<コンセプト>

「社会に触れる」をテーマに、身近な地域社会の「仕事」や「活動」を題材に、何らかの「問い」を立て、それをプロジェクトとして実際に現場で「確かめる」／“試す”ことを通じ、自分の興味・関心など、自分と社会との“つながり”を感じてみることを目的とする。

<ねらい>

- ▶ 些細なことにも面白さや興味を見出すアンテナと感度
- ▶ “前のめり”から生まれる新たな自分発見
- ▶ 進路／大学での学びのヒント



授業計画	第1回 オリエンテーション	概要／テーマ設定／チーム編成
	第2回 ミッション発表	ゲストが授業に参加し、活動紹介とミッション発表
	第3回 問いの設定(1)	ゲストの話から「問い」を設定し、取り組み内容の計画を立てる
	第4回 問いの設定(2)	取り組み内容の計画を立てる(つづき)
	第5回 ワークとフィールド	学外での地域プロジェクトの実践
	第6回 振り返りと発表	実践内容のプレゼンテーションと全体の振り返り



MESSAGE

これからの高大連携授業はより「体験」を重視していく

大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部 基幹教育機構 早川 公准教授



高大連携授業は、我々教員の「教育力」も問われると感じています。伝え方、教え方、導き方において大学生とは異なるアプローチが必要だからです。この取り組みには、大学の各学科の教員・職員が関わっていますが、私を含めて教える側にも大きな学びがありますね。

高大連携授業とは何か。ひとことで言えば「学び方を学ぶ」ことに尽きると思います。2021年からアクティブラーニング形式に変え、グループワークを取り入れたことを機に、高校生たちがより自分自身の進路選択や将来を考える時の糧になるようなプログラムづくりを心がけて授業の枠組みを構築してきました。とはいえ現在も試行錯誤の段階で、実際に授業を行う度に関わった教員たちで振り返りを行い、生徒たちの反応を見ながら改善しています。

そんな大きな可能性を秘めた本学の高大連携授業ですが、2023年度の後期からは、大阪国際高等学校の2年生に向けたプログラムを展開します。実際に地域の問題に向き合って学ぶプロジェクト型学習(PBL)を通じて、自らの興味・関心に気づく場を提供するのが狙いです。「大学・短大で何を、なぜ学ぶのか」が問われる総合型選抜入試を念頭に置きながら、高校だけで設計が難しい探究的な学びを強化します。

高大連携授業レポート

2023年度前期の高大連携授業は、大阪国際滝井高校総合進学コースの3年生を対象に展開されました。テーマは「マイプロジェクト」。自分がこれからやってみたいことを決め、理由や背景を探ったり、どんな価値を生み出せるかを考えます。ここでは第3回目の授業風景をレポート。はじめてのマイプロジェクトに戸惑っていた1～2回目とは違い、リラックスして楽しむ高校生たちの表情が印象的です。



第3回目の授業は、これまでの進捗確認。最終回のプレゼンに向けて準備します。



色々な言葉が書かれたカードを使って、グループ内でコミュニケーション。自分の価値観や大切にしているものを明確にします。



大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部の教員がサポート役として参加。それぞれの専門分野を生かしてアドバイスします。



マイプロジェクトを具体化し、発表に向けてまとめます。「やりたいことが絞れない」「どう言語化したらいいの？」などの質問に教員がアドバイス。

VOICE

安間 いちかさん

グループワークでは色々なゲームを通じて、チームのみんなへの理解も深まったし、同時にもっと仲良くなったような気がします。また、同じテーマに取り組んでも、自分と友達の考え方がぜんぜん違うことにびっくり。人間って面白いなあとあらためて感じました。自分に向き合い、マイプロジェクトを考えるのは難しいけれど、やりがいのある作業でした。



尾田 葵さん

それぞれの個性を発見するゲームでチームのみんなから私の印象を聞き、思いもよらなかった面を発見。自分を知り、理解するプロセスを興味深く体験しました。

大学では自分で考え、自分と向き合う学びができるのだなとワクワク。今はあまり将来の夢が見えていないので、この授業を通じて明確にしていければと思っています。

知ってる？

しんどい時は 呼吸が浅くなっているのかも

人は1日に2万～3万回もの呼吸をしています。緊張や不安のある時は浅く速く、眠っている時やリラックスした状態では深くゆったりと。感情の動きと呼吸は、脳の中の同じ場所が司っていて、連動しているのです。

呼吸は体内に酸素を取り込む役割をしています。これが浅くなると血液中は酸素不足に陥り、全身に行き渡らなくなってしまいます。特に、普通の筋肉細胞の20倍も酸素を必要とする脳にとってはダメージも深刻。また、常に浅い呼吸が続くと交感神経ばかりが働いて、胃腸の動きや免疫機能を正常化させる副交感神経の働く時間が足りなくなり、それが身体の不調に表れます。



ストレスが浅い呼吸を招き、
浅い呼吸がまたストレスを…
悪循環に陥らないで！

効率重視社会に生きるストレスだらけの現代人は、普段から呼吸が浅くなりがち。しんどいな、疲れやすいな、と思ったら自分の呼吸状態をチェックしてみましょう。

やってみよう！

どこでもできる 腹式呼吸で リラックス習慣

普段から深くゆったりした呼吸ができるように、呼吸法のひとつ「腹式呼吸」を身につけましょう。厚生労働省の『ここもメンテしよう』というサイトでも、セルフケアメニューとして紹介されているポピュラーな方法です。体勢は、仰向けに寝転んでも、立っていても座っていても大丈夫。まずは背筋を伸ばしリラックスしてお腹に両手を当てます。

最初は息を吐くことから。「いーち、にーい、さーん」と頭の中で数えながら、口からゆっくりと吐き出します。身体の中の悪いものをすべて出しきるイメージで、お腹を徐々にへこませるようにしましょう。



おへその下「丹田」を意識して、
お腹がしっかり動いているか
置いた手で確認しながら

吐き出しきったら、今度は鼻から深くゆっくりと、お腹を膨らませるように息を吸い込みます。吐く時間は吸う時間より長く、倍以上をかけるつもりで。この吐く・吸うを5～10分繰り返します。

日常で気づいた時に無理なく行う習慣をつけて、心身を整えるアシストを！



今日からできる
セルフメンテだよ！

呼吸でセルフメンテナンス

いつも何気なく行っている「呼吸」。実はそのやり方が健康を左右する力ギになっているのです。心身を整える呼吸のしかたとは…



二人のバイタリティは
クラブ活動で培われたものなのでしょう。

大阪国際大学
大阪国際大学短期大学部
学長 **宮本 郁夫**

吹奏楽の経験は、保育士として働く将来にも役立つと思います。

人間関係にもアンサンブルやハーモニーが大事なんですね。

今号の対談相手は、元気でキュートな女子学生。大阪国際大学短期大学部
幼児保育学科2年生の岩根心優さんと、宇野美姫さんです。二人は大阪国
際滝井高校吹奏楽コース出身。本学の吹奏楽部で活躍しながら、保育士に
なるという夢を叶えるべくクラブと学業を両立しておられます。大好きな
吹奏楽を語る時の、二人のキラキラした笑顔が魅力的でした。



大阪国際大学短期大学部 幼児保育学科2年生の岩根心優(左)さんと、宇野美姫(右)さん

辛いことを乗り越えた
先に楽しさがある。

宮本 吹奏楽を始めたきっかけは何ですか。

岩根 母が吹奏楽部だったので、同じフルートを私もやってみたくて中学から始めました。その楽しさに魅了されて、高校進学の際に滝井高校を選びました。

宇野 私は姉が滝井高校の吹奏楽部にて、クラリネット担当でした。演奏会に行った時に「私もやり

たい!」と。

宮本 二人とも、近い人の影響なんですね。大阪国際大学短期大学部(以下OIC)に進学したのはなぜですか。

岩根 子どもの頃から保育士になりたかったのと、OICでも吹奏楽を続けたからからです。OICの幼児保育学科は、併設の幼稚園があるので子どもたちと関わる機会が普段から多いのが魅力でした。

宇野 私も同じです!オープンキャンパスに行った際、勉強とクラブが両立できる環境が整っていると感じてOICに決めました。

宮本 勉強も吹奏楽もがんばりたいという姿勢が素晴らしいですね。両立のために心がけていることはありますか?

岩根 集中する時と休む時のメリハリをつけることが大事だと思っています。

宇野 さばりたい日ってあるじゃないですか。そんな時も、とにかく机に向かってみると意外に乗っかってるので「まずはやる」を motto にしています。

宮本 バイタリティがありますね。厳しい部活動が続けてきたことが強いメンタルにつながったのでしょうか。

宇野 中学からずっと吹奏楽を続けてきて思うのは、辛いことを乗り越

越えた先に楽しさがあるということ。勉強でもそうかなって。

宮本 まさに人生はそうですね。

吹奏楽の経験は人間関係
にも将来にも役立つ。

宮本 吹奏楽の魅力は何ですか?

宇野 私がクラリネットが好きなのは音域が幅広いところと、暖かな木の音色です。また私たちの演奏に感動したり、時には涙を流してくださるお客様を見ると、音楽を通して思いが伝わった...いつも胸がいつぱいになります。

岩根 普段は同じ楽器同士などで集まって練習するのですが、曲の解釈がお互いに違う時、話し合いながらベストな演奏を作り上げていきます。「自分はこう思うけど、別の考え方もあるんやな」という経験は、人間関係においても勉強になるなと感じています。

宇野 そうそう!吹奏楽の良さってやっぱりみんなで協力して作品



をつくり上げることなんです。

宮本 素晴らしいね。私が学長になつてから、学生時代に体験してほしいものを3つ挙げていて、それが「海外留学」「地域貢献」そして「クラブ活動」なんです。私自身も大学時代、英語が好きだったのでE.S.S.に所属していて、クラブで培った経験は就職にも役立つし、その頃の仲間とは今もつながっています。

岩根 保育に音楽は重要な役割を担っているの、吹奏楽の経験は将来に役立つと確信しています。

宇野 音楽を通じて子どもたちの情操を豊かにしていくことが私の夢です。そういう意味でも、クラブ活動は私にとって楽しい以上に価値ある宝物ですね。

シンセリティとフェアネスを
持つて社会へ出てほしい。

岩根 私たちからも質問させてください。学長はこれまで社会で多くの人と関わってこられたと思いますが、人間関係をうまく構築するために何を意識されていますか?

宮本 大事なのは、自分の意見や考え方を持つことかな。人の意見を聞くの必要だけど、自分の意見がないと流されてしまう。あな

はないかな。

岩根 主張しすぎたりして。

宮本 そのくらいがちょうどいい。喋らなかつたあと後悔するより喋りすぎるほうがいい。

宇野 私からの質問です。もうすぐ社会に出るのですが、社会人として大切にすべきなのは何でしょうか。

宮本 シンセリティとフェアネスでしょうか。前者は誠実、真面目という意味で、社会人としての基本ですね。後者は公平さ、色眼鏡で見ないこと。今後ますます社会はグローバル化し、文化や宗教、生活習慣が違う人々と接する機会が増えるでしょう。自分の物差しにこだわらず、公平な視点を持つことが、共生社会につながると思います。

宇野 アンサンブルやハーモニーを人間関係でも奏でるんですね。

宮本 まさにそうですね。調和する感性を大事にして社会で活躍してください。

岩根・宇野 ありがとうございます!



インターハイ出場!

バレーボール部

バレーボール部は滝井高と国際高の合同チームとなって2年目。チームワークも良く、接戦でしたが、惜しくもベスト16での敗退となりました。

(8/1~8/5 於:北海道釧路市)



フェンシング部(滝井高)

「学校団体の部」「個人 フルールの部」「個人 エペの部」において、インターハイ出場。「お互いを思いあうことのできるチーム」を目指し、「応援してもらえ人になろう」を合い言葉に練習に励みました。悔しい結果になりましたが、感動の試合でした。

(8/2~8/6 於:北海道室蘭市)



学園・大学

連携協定締結

アウトドア用品の株式会社モンベルと
包括連携協定を締結～大阪国際学園

2023年2月2日、包括連携協定を締結しました。この協定は、相互の持つ情報・技術および知恵を生かし、アウトドア活動等の促進を通じて本学園の教育の質の向上に資することを目的としています。



左:モンベル 辰野勇 代表取締役会長 右:大阪国際学園 奥田吾朗 理事長

「全国で2番目に小さなまち」奈良県三宅町と
連携・協働に関する協定を締結～大阪国際大学

2023年5月16日、連携・協働に関する協定を締結しました。奈良県三宅町は、面積約4km²、人口6,557人(2023年4月1日現在)の「全国で2番目に小さなまち」で、大阪から約1時間半(電車)で移動できます。学生は様々なプロジェクトに挑戦し、三宅町とともに地域社会の課題解決と発展に役立てられるよう取り組んでいきます。



左:三宅町 森田浩司町長 右:大阪国際大学 佐藤智明 経営経済学部長

大学

ナッツのかわりに干し椎茸を使った
「まるでナッツ!きのこのカリッとフロランタン」を考案

喜多野宣子准教授(人間科学部人間健康科学科)とゼミ学生の米田穂乃香さんの応募作品が、第8回「食物アレルギー対応食 料理コンテスト」(主催:公益財団法人ニッポンハム食の未来財団)おやつ・デザート部門で優秀賞を受賞しました。受賞作品「まるでナッツ!きのこのカリッとフロランタン」は、ナッツアレルギーを持つ人でもおいしく食べられるように、代替食品として「干し椎茸」を食材に選び、ナッツのようなカリッととした食感・風味に仕上げました。



大学

谷川哲朗准教授がフィンスイミング
アジア選手権大会の日本代表に選出

谷川哲朗准教授(人間科学部スポーツ行動学科)は、2023年5月4~6日に開催された第35回フィンスイミング日本選手権大会に出場し、アジア選手権大会の日本代表に選出されました。同大会は11月にタイ・プーケットで開催予定。

〈内定種目〉50mアブニア、50mサーフィス、100mサーフィス、混合4×50mサーフィスリレー、男子4×100mサーフィスリレー



大学

「鹿野ちゃれっじ」鳥取市長から感謝状

久保由加里教授(国際教養学部国際観光学科)ゼミ生と有志は、8年前から鳥取県鹿野町のいんしゅう鹿野まちづくり協議会や住民の皆さまと共に、耕作放棄地を果樹の里山にデザインする活動「鹿野ちゃれっじ」を展開しています。その一つとして2022年度はフットパスをして採集した草花を入れたハーバリウムを作成し、同町のイベントと大学内で販売し大変好評でした。売上金は全て鳥取市の生物多様性の保全のために鳥取市に寄付し、鳥取市長から感謝状をいただきました。



左から、深澤義彦 鳥取市長、前 穂乃実さん、鶴岡えみりさん、久保由加里教授

大阪国際高等学校 × JTB

修学旅行でSAFを共同購入し、航空機搭乗分の二酸化炭素を相殺

次世代の航空燃料として注目されているSAF(Sustainable Aviation Fuel)をJTBと共同購入し、修学旅行を7月に実施。ルフトハンザドイツ航空では、フライトの二酸化炭素排出量をオフセットするCompensaidプログラムを2019年より導入していますが、学校法人のSAF購入によるオフセットはアジア地区で初の取り扱いとなります。

※現在、SAFの原料となるのは、主に植物などのバイオマス由来原料や、飲食店や生活の中で排出される廃棄物・廃食油など。持続可能な原料から製造されるSAFは、従来使われてきた化石燃料と比較して、約80%の二酸化炭素排出量を軽減することができます。



左: JTB 鷲見匡紀 大阪教育事業部長
中: 大阪国際中高 松下寛伸 校長
右: ルフトハンザドイツ航空 ローレンス・ライアン 日本・韓国地区支配人

テニスコート全面改修

オムニコートが「グリーンセット」と呼ばれるハードコートに全面改修されました。「グリーンセット」は、球足が遅い状態をキープでき、全豪・全米オープンやオリンピックなど、主要トーナメントでの採用が進んでいるハードコートです。この世界基準のコートで日々練習することで、フットワークがみががかれ、正確で力強いストロークを身につけていくことができます。



幼児保育学科学生のこども園でのボランティア活動

こども園では、世代の違う人たちが「ふれあう保育・教育」を展開しています。学生はこども園でのボランティアに参加し実践に即した学びを、また園児たちは、お兄さん・お姉さんに興味津々でどんどん話しかけて楽しい時間を過ごしています。



池田 紗良さん(人間科学部 心理コミュニケーション学科)が「全国大学ビブリオバトル2022 ~ファイナルステージin浦安」本戦出場!! 初出場で25名のファイナリストに!!

全国大学ビブリオバトル2022では、地区予選・地区決戦で延べ1524名の学生がバトルを繰り広げ、2022年12月25日、浦安で本戦が開催されました。本戦に出場できるのは、全国のファイナリスト25名だけ。本戦では、さらに5名だけが決勝に進めます。惜しくも池田さんは決勝には進めませんでした。初出場で本戦まで勝ち抜き大健闘の活躍でした。



『また同じ夢を見ていた』

「人生とは給食みたいなものよね」そう言った主人公の小柳奈ノ花は「人生とは」が口癖の、少し大人びた小学四年生の少女である。奈ノ花はこれ以外にも、独特かつ核心をついた面白い例えをしている。故に学校では浮いた存在で友だちもいなかった。しかし、奈ノ花には手首に傷のある高校生の南さん。春を売る仕事をしているアバズレさん、一人静かに余生を過ごすおばあちゃんと素敵な友だちが三人もいた。

ある時、授業で幸せについて考えてくるという宿題を提示され、それをきっかけに「幸せ」や「人生」について彼女たちと模索していく。その中で少し大人びていた奈ノ花が子どもらしい姿に戻っていく成長過程は心惹かれるものがあった。そして最終章で散りばめられた伏線が回収され、物語に隠された本当の意図がわかったとき思わず声が出た。正直触れられているテーマだけ見ると、タイトルには関係ないように思えるが、そこがこの作品の核なのだ。だから敢えてここまで触れなかった。何故タイトルが「また同じ夢を見ていた」なのか、また自分にとっての「幸せ」や「人生」とはどのようなものなのか。それについては是非、頭を悩ませてほしい。

人間科学部心理コミュニケーション学科3年 中岡輝聖



住野 由 著
双葉社 2016年



研究室 探訪

大阪国際大学
国際教養学部国際観光学科
五月女 賢司准教授 研究室



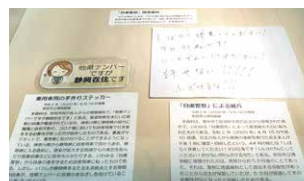
「博物館学」が五月女先生のご専門である。簡単にいえば博物館の運営や展示の計画、文化財の管理などを始め、社会における博物館の価値を高めるための学問領域なのだ。先生の関心と好奇心はもともと広範だ。自らを「歴史屋」と呼ぶように、市井の人々の生活すべてを記録したいという熱意にあふれている。その一端が垣間見える活動が、コロナ禍における一次資料の収集である。「マスクが着用できない方に対する誹謗や、飲食店に休業

を促す中傷チラシが話題になったことがありましたが、一時的にメディアに取り上げられましたが、研究対象として残そうとする専門家はいいですね。例えば100年前にスペイン風邪が大流行したという記録はありますが、当時の暮らしぶりや示す資料が残っていません。これは私がやらなければと思ったのです。次にパンデミックが起こった時のために」と、先生。この思いが、2020年に吹田市立博物館で開催した「新型コロナと生きる社会」私たちは何を託されたのか」というミニ展示へつながった。歴史に記録されることのない市井動向をとらえ、社会の裏側を映し出すこの展示会は、国内外のメディアや研究者に注目されたという。

そんな五月女先生のルーツは、JICA(独立行政法人国際協力機構)海外協力隊に参加し、アフリカのザンビアへ派遣されたことにさかのぼる。識字率が低い地域ということで、文字で伝えるよりも、一目見て理解することが出来る博物館の可能性に気づいたのが始まりだ。「様々な博物館を巡る中で、その面白さにのめり込み英国へ留学して大英博物館でも働きました。それ以降、ずっと博物館学に夢中になっています」。

先生が今、最も関心を寄せているのが「返還ブーム」だ。欧州がアフリカやアジアの植民地から略奪した文化財を、倫理的観点から返還しようとする動き

のことである。「返還ブームは一見して良いことのようにですが、返還先の国に、きちんとした博物館がなければ文化財が返還されても劣化してしまう。一方、略奪から100年以上が経過しているため、返還先が国なのか、州なのか、あるいは民族集団そのものなのか、ということが解決する前に返還してしまうと、当該社会を再び混乱に陥れる可能性もあります。このような複雑な状況をどう解決していくのかを見守っていきたい。大阪国際大学で教鞭をとる傍ら、常に世界を見つめている五月女先生。学生たちに伝えたいのは「歴史を通して人生を学んでほしい」ということだそう。博物館学には確かに過去の出来事を調査し、資料を集めて管理するという一面があります。しかしそこには過去の人々の息吹があり、現代にも通じる価値観や真理を発見することが出来ます。それは人生における羅針盤となるでしょう」。



「自粛警察」関連資料



吹田市立博物館ミニ展示「新型コロナと生きる社会」～私たちは何を託されたのか～

独白

大阪国際学園
理事長 奥田 吾朗

豊かさに埋没する価値

ある女性ピアニストの話。マドリッド王立音楽院卒業後、キューバの国立音楽大学の講師をかわきりに、彼女の音楽に対する姿勢が変わる。国立大学ではあるものの、ピアノの88個の鍵盤がすべてそろっているピアノがない。しかし、学生たちは、そのピアノでベートーベンを奏でる。演奏旅行では、コロンビアのアンデス山脈に住む部族や、アマゾン川流域の先住民の楽器は、自然や神々との交信のためにあり、自分を表現するために存在していないことを知る。

以来、楽譜にとらわれず、その場に合わせた音楽を奏でるようになる。雨が降れば雨と共に演奏し、鳥がさえずれば鳥と共に音を奏でる。ピアノを通して、その社会と一体になる音楽を目指す。そして、日本人が如何に、自然と音楽の調和を理解できているかを認識し、私たちの文化の価値を再認識したとのこと。

2025年に大阪で万博が開催される。「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマに心から期待をしたい。豊かな社会に埋没している私たち。急激な技術の進歩が、豊かさだけでなく私たちに何をもたらすのか…。

私の気になること



作者：ナオコ

- 本誌に記載の学年、肩書き等はすべて情報収集時のもので、発行時とは異なることがあります。ご了承願います。
- 本誌へのご意見、お問い合わせ等は大阪国際学園広報・校友課までご連絡ください。

各学校の最新ニュースは公式サイトでご覧いただけます。

大阪国際学園

検索



この印刷製品は、環境に配慮した資材と工場で製造されています。



学校法人 大阪国際学園

大阪国際大学
大阪国際大学短期大学部
大阪国際滝井高等学校
大阪国際中学校高等学校
幼保連携型認定こども園
大阪国際大和田幼稚園